

浅舞絞「段変わり文様着物」に見られる絞り染めの技術

宮本康男*

はじめに

江戸時代末期から明治時代はじめ頃の時期に染めたとされる、浅舞絞の段変わり文様の着物がある。この資料は比較的とりあげられることが少ないが、浅舞絞のデザイン的な特徴の一つを端的に示す資料である。この絞り染めを復元的に製作することにより、技術的な考察を行った。

1 浅舞絞とその周辺

浅舞絞は、秋田県平鹿郡浅舞地区で生産された綿布を用いた藍の絞り染めである。現在は地元の保存会によって技術保存が行われている。

浅舞絞はその起源が明瞭ではないが、江戸時代末頃に発展した横手平鹿地区での木綿産業とともに行われるようになったものと考えられる。染めに用いる藍の多くは近隣の山内地区他で栽培されたが、この藍の栽培や藍染め技術の招来がいつ頃であったかについてもよくわかっていない。

県内で生産された絞り染めの内、古くから行われたとみられる鹿角の絞り染めの技術についてはすでに本館研究報告22号でその一部を報告したが、浅舞絞はこの鹿角の抽象的でシンプルな意匠と素朴な技術になる絞り染めとは趣を全く異にする「新しい絞り染め」が平鹿地方に招来され根づいたものとみられる。

現在浅舞絞として伝えられている盛期の製品は「上絞り」といわれる手の込んだ高級品がほとんどである。それらに施された絞り染めの意匠はモチーフとして具象的イメージが多用され、大胆な中にも洗練された感覚が認められ、あたかも近世の小袖のデザインを思わせるものがある。

しかし、浅舞で生産された絞りの全てが手の込んだものであったわけではなく、製品の多くは「並絞り」と呼ばれる比較的手がかからず量産で

きる絞り染めであったと考えるのが妥当であろう。しかし現在この並絞りの製品群の全貌を知ることにはできない。日用品として用いられたため、大切に保存されることもなく消耗してしまったのか、あるいは、名前も伝えられない古布類のなかに紛れ込んでしまっているのであろうか。絞りの意匠に付された呼び名は数多く伝えられているが、それと実資料が対応するものはごく一部である。その中で柳絞りだけは、道具立ても技術も単純であるためよく伝承されている。

ここで、「新しい絞り染め」といっている技術の体系は、愛知県の有松・鳴海地区で盛んに行われた絞り染めの技術が伝えられたといわれているものである。また、有松・鳴海地区の絞り染めの技術は、九州の豊後地方で行われた豊後絞りと呼ばれる絞り染めの技術が伝えられたものとされている。

2 「段変わり文様着物」の技術復元

1) 浅舞絞「段変わり文様着物」について

浅舞絞には紺地に白で意匠を表す「紺絞り」と白地に紺で意匠を表す「白絞り」、さらに「これらを複合したもの」があるが、ここで復元に取り組んだのは複合技術の絞りである。

復元対象とした浅舞絞の「段変わり文様着物」の意匠は濃い藍色、中間の濃さの藍色、白絞りの面を大胆に組み合わせた華やかなものである。

浅舞絞りで上絞りといわれる手の込んだ絞りの作品の中には、この大胆な藍の濃淡と白の構成によって華やかさを演出したものが多く見られる。

この着物の染めは見本ぎれをつないだような単純な構成により、技術的には容易な染めと見られがちであるが、実際はかなり困難な要素を含む染めである。(図-1)

*秋田県立博物館

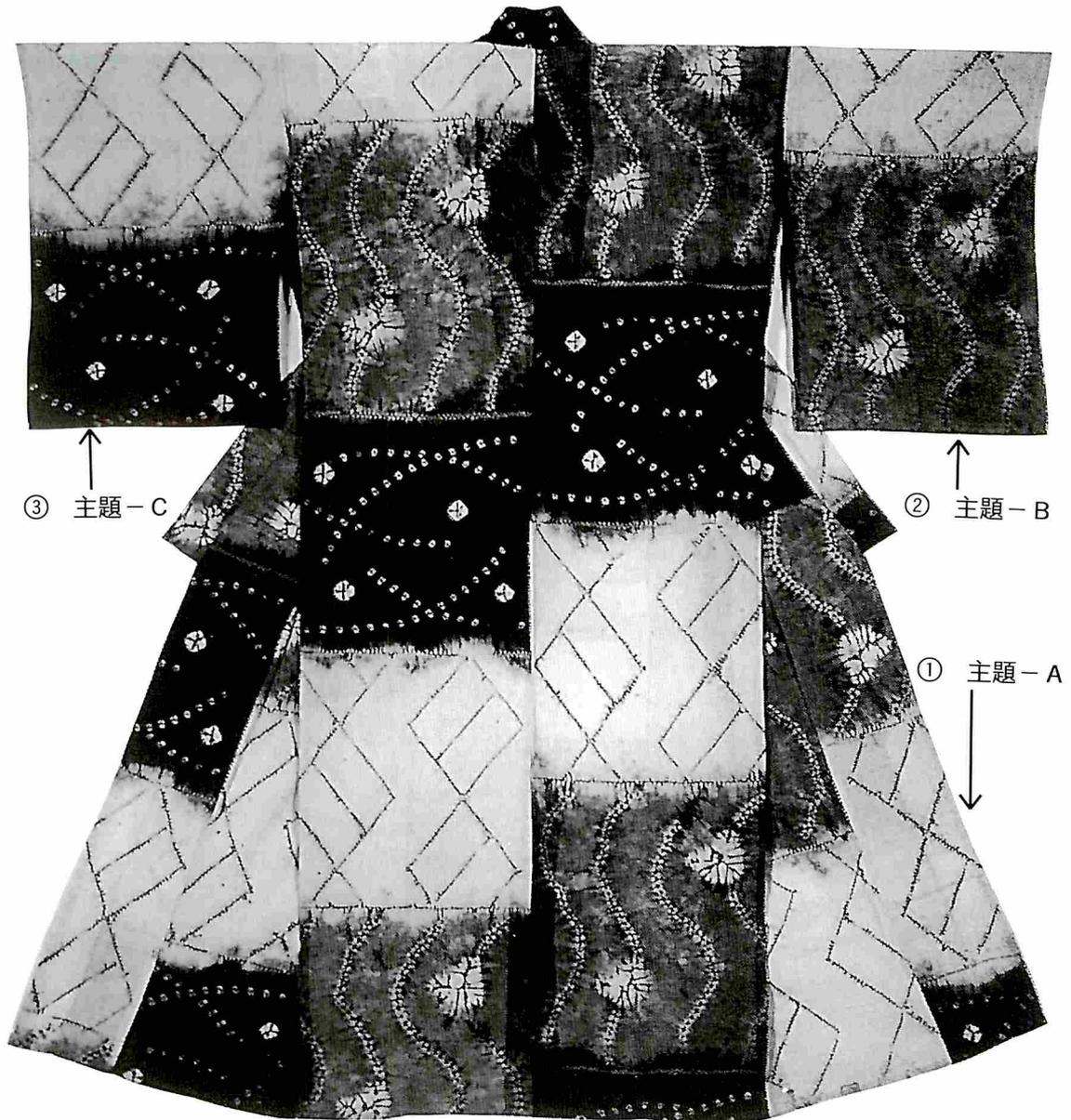


図-1 浅舞絞「段変わり文様着物」 利順二氏蔵 秋田県雄勝郡西馬音内

この段変わりの意匠は次に示すような三つの部分が一尺内外の間隔で配置された大柄の段変わりの意匠である。

- ① 主題-A 白地に紺色の線で、菱形をベースにした直線文様を表した部分。
- ② 主題-B 浅黄地に紺色で、波に千鳥と考えられる文様を表した部分。
- ③ 主題-C 紺地に白で、闇に飛ぶ螢を思わせる文様を表した部分。

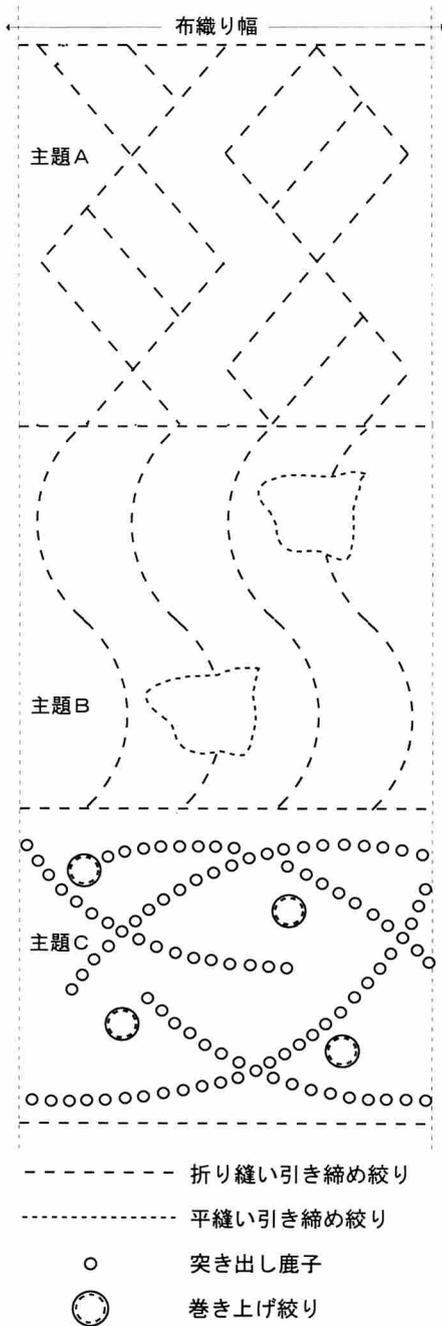
①の部分は折り縫い絞りの折り目の部分だけを染めたもので、一般に白影絞りと呼ばれている技法で染められたと考えた。しかし、全体を白影絞

りにするのは異なり、長い布の部分部分に白影絞りを施すためには特別な工夫が必要である。

②の部分は、縫い絞りや巻き上げ絞りの糸の跡が白、地は多少のムラがみられるがほぼ均一に浅黄色が染められている。波を表す曲線は折り縫い絞りで、折り目の部分のみが紺色に染められている。千鳥を表す部分は、縫い締めと巻き上げで糸のかからないところは紺色に染まっている。単に浅黄を染めた後に段全体を防染したものではない。

③の部分は、蛍のように見える部分は巻き上げ絞り、飛跡のように見える曲線は鹿子絞りを並べて表し、紺色に染められている。

図-2 段変わりのデザイン



2) 技術復元への方向性について

長い布全体を一度に藍に浸して染めながら、地色だけを白、浅黄、濃藍に染め分けるといのは想像以上に困難なことと考えられる。残念ながら技法の伝承についての情報が無いので、全くの手探りで技術復元に取り組んだ。そして、今回いくつかの試験的な染を繰り返していく中で見出した復元への方向性は次のようなものであった。

◆主題A 1) ①の部分／直線文様

折り縫い引き締め絞りを施してから、白影絞りにする。

折り目を同一面になるようにそろえて折り目だけが出るように布でくるみ、さらにビニールシートで（本来は油紙のようなもので）くるむ。

くるまれた布を同じ幅の板2枚ではさみ、紐を巻いて強く締め付ける。

◆主題B 1) ②の部分／波に千鳥のモチーフ

まず波の曲線を折り縫いする。次ぎに千鳥の輪郭を平縫いして引き締め、止めてから粗く巻き上げ絞りにする。千鳥を絞った後波の折り縫いを引き締めて止める。

※この部分は一旦全体を浅黄色に染めてから、主題Aの白影絞りと同様の処置をして濃色を染め、地を浅黄色に残す。

◆主題C 1) ③の部分／闇に螢のモチーフ

螢に見える大きい方の円は巻き上げ絞りにする。軌跡の粒（小さな円）は突き出し鹿子と見られるが、今回は作業能率を考慮して鉤針を用いて鹿子を括る。

3) 実際の製作の手順

1. 主題Bの千鳥と思われる形の輪郭を粗くぐし縫いする。糸は引き締めて縛る分のゆとりを残して切る。

2. 段と段との境界を折り縫いにする。

3. 主題Aの直線模様を折り縫いにする。今回は後の引き締め作業を容易にするために、屈曲させないで直線部分に分けて縫う。交差する部分は相手の糸を割って縫わないようにする。

4. 主題Bの波線模様を折り縫いにする。

5. 主題Cの大きい方の円をくの字形の鉤針（三浦針）にかけて巻き上げ絞りにする。

6. 主題Cの軌跡の粒（小さな円）を棒の先につけた小さな鉤針（鹿子針）にかけて鹿子絞りにする。これは本来は突き出しで絞ったものと見られるが、製作者（筆者）が技術的に未熟であるため、突き出しではどうしても糸が解けやすく、仕方なく針にかけて絞った。

7. 主題Bの千鳥と思われる形の輪郭のぐし縫いを引き締めて止め、余った糸を用いて粗く巻き上

げ絞りにする。(糸が不足であれば足す)

8. 主題Aの直線模様の折り縫いを引き締めて止める。(できるだけ布の耳側で糸を引いて止めるようにすると作業が容易である)

9. 主題Cの波線の折り縫いを引き締めて止める。

10. 段と段との境界の折り縫いを引き締めて止める。

11. 主題Aの部分の折り縫いを、布の両耳側から押しつけて板状にまとめ、引き締めた辺が板の木口に相当する部分にきちんと揃うようにする。板状にまとめた木口に相当する部分の反対側が薄くならぬようにまとめて粗く縫って止める。

12. 11のまとめた部分を縫い目をまとめた木口部分を露出させて、別布で巻く(木口部分だけを染めようとしているので、そのための防染)。このとき後の板締めが均等にできるように、薄い部分を整形して厚みが出るように布を巻く。

13. 12で布を巻いて防染した上からさらにビニールフィルムで巻いて防染する。(元は和紙や油紙等を用いたと思われる)

14. 13でまとめたものを、その木口幅の板で挟んで強く縛り、木口部分から内部にまで染料が浸透するのを防ぐ。これで、主題Aの部分を白影絞りにして、直線模様を藍色で表し地を白く残して染める準備ができた。

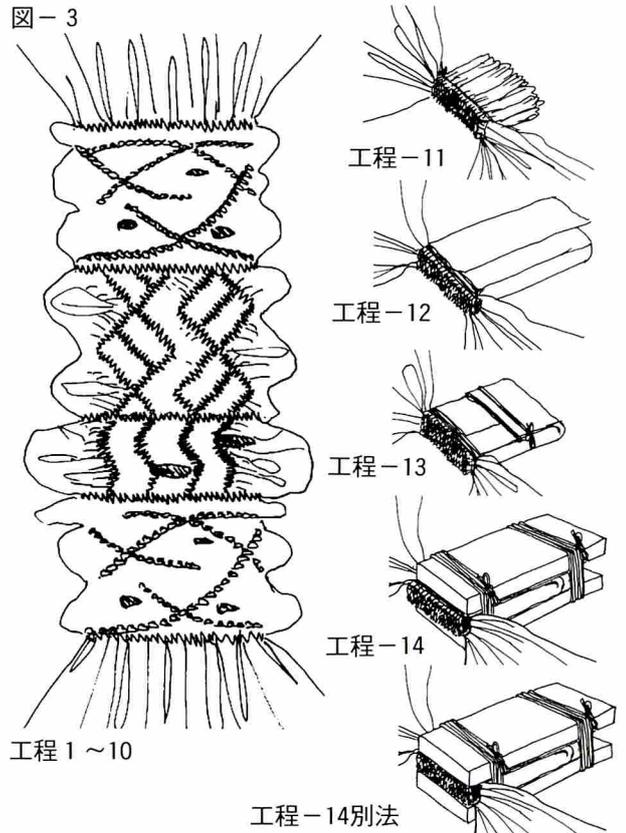
15. 14までの処置をした布を水につけ十分吸水させ、軽く絞れる分だけ水を絞ってから薄目の藍で浅黄色に染める。(特に板締めした部分の中に十分水が浸透している必要がある。吸水が不十分だと藍が中に浸透する。)

16. 15を乾かしてから主題Bの部分を主題Aの部分と同様にまとめて、布とビニールフィルムで巻き、板で挟んで強くしめる。主題Aと異なるのは千鳥の巻き上げ絞りが木口部分から突き出ていることである。これで地を浅黄色に残して、千鳥の巻き上げ絞りや波線の折り縫い絞りを藍色に染める準備ができた。

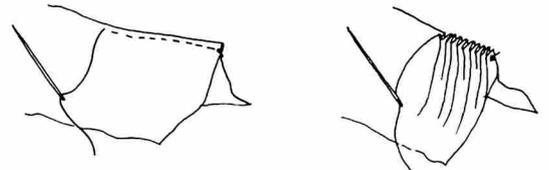
17. 16までの処置をした布を水につけ十分吸水させ、軽く絞れる分だけ水を絞ってから濃い藍で繰り返し染める。途中で中干しをいれて十分濃色に染まったらよく水洗いをし、板締めの板をはずしてから乾燥させる。

18. 絞り糸を解き再度洗って乾燥させてから仕上げる。

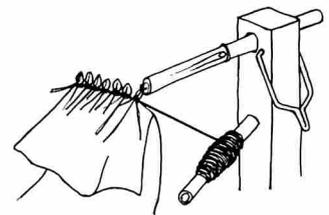
図-3



折り縫い絞り



機械鹿子



突き出し鹿子

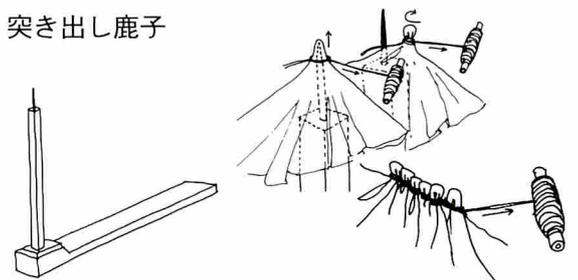




図-4 染めあがった布地を仕立てた帷子

おわりに

完成したものを図-4に示す。主題Aの部分は、見本とした元資料に比べて文様が滲んだ感じに染め上がった。(図-5)これは板締めの際のかけ方によるものであり、試作の段階でも同様に滲みが出ていた。この段階では、板締めが緩いためと考えたので、本製作ではできるだけ板を強く締めて染めた。しかし、今度も試作と同様の滲みが出る結果となった。この結果をもとに板絞めの方法を再度検討し、これまで折り縫い絞りの縫い目のところから下を押さえていた板を、折り縫い部分全体を押さえるようにして再度試し染めをしたところ、滲みのない白影絞りとなった。(図-6)

主題Bの部分は概ね予想通りに染め上がったが、千鳥の文様の輪郭を縫い締めた針目が元資料に比べて少し細かった。(図-7)縫い締めの針目の幅は巻き上げるときのひだと関係するので、そのちがいは染め上がりに大きく影響する。

主題Cの部分は、鉤針を用い布を畳んで糸をかけたため鹿子の粒が四角くなり、見本とはかなり印象が異なる染め上がりとなった。(図-8)参考のために、突き出し鹿子を図-9に示す。

今回おこなった方法で白影絞りの入った段変わりの意匠をを一応染めることができたが、実際にはどうだったのであろう。この実験を手がかりに、技術資料の発掘をめざしていきたい。

図-5~9 部分拡大図

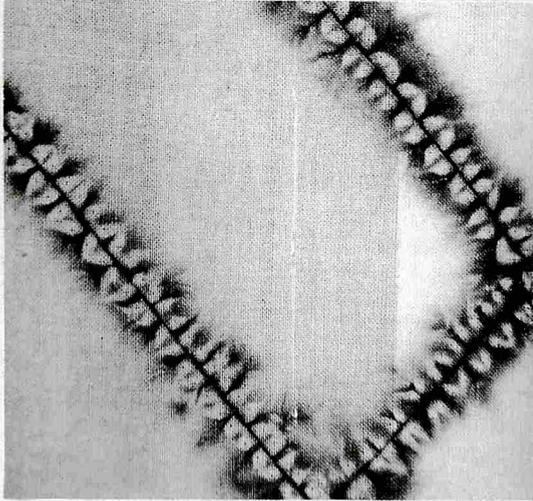


図-5

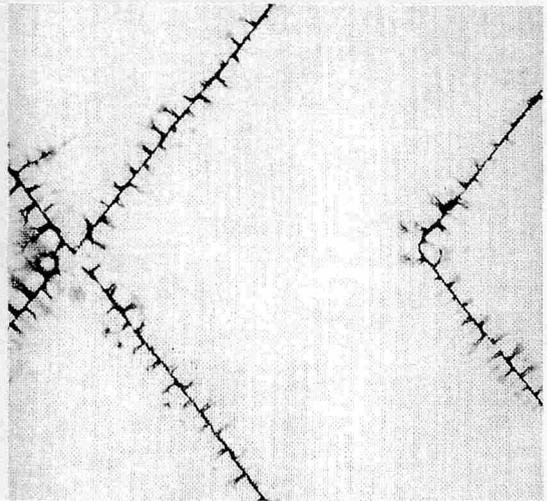


図-6

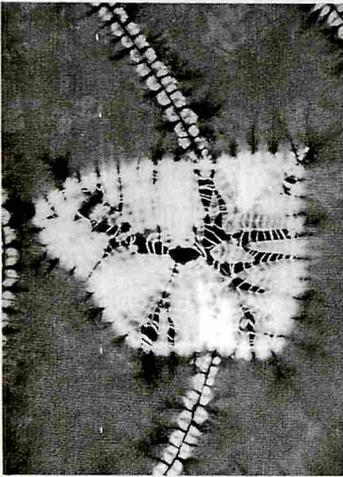


図-7

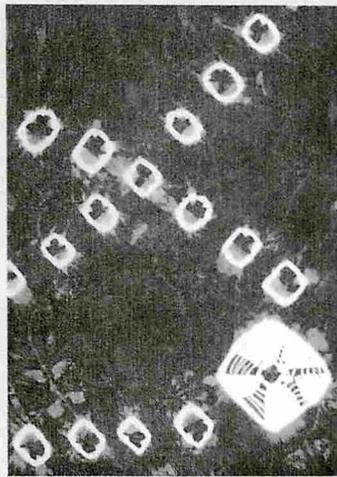


図-8

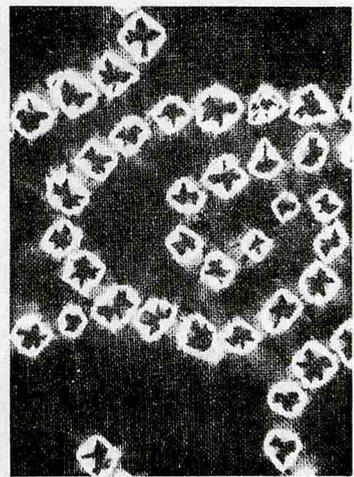


図-9

参 考 文 献

油谷満夫, 1983, 浅舞藍染. 秋田県文化財調査報告書第 105集

秋田の工芸技術, 秋田県教育委員会.

安藤宏子, 1992, 日本の絞り技法. 日本放送出版協会.

安藤宏子, 1993, 日本の絞り. 京都書院.

安藤宏子, 1994, 豊後絞りりと九州地方の絞り. 「木綿の絞り」

展-豊後絞りりとその展開-, 大分県立芸術会館.

糸井藤之助, 1962, 山内村郷土資料第拾輯. 平鹿郡山内村公民館.

沖津文幸, 1984, 絞り染の技法. 理工学舎.

沖津文幸, 1994, 絞りの括りと染め. 理工学舎.

平鹿町史編纂委員会, 1984, 平鹿町史<二工業-染織>. 平鹿町.

藤枝アイ, 1983, 横手木綿. 秋田の民芸, 秋田魁新報社.

藤枝アイ, 1983, 浅舞絞り. 秋田の民芸, 秋田魁新報社.

藤枝アイ, 1983, 浅舞正藍. 秋田の民芸, 秋田魁新報社.

山田貞吉, 1983, 浅舞絞. 秋田県文化財調査報告書第105集秋田の工芸技術, 秋田県教育委員会.

横手郷土史編纂委員会, 1933, 横手郷土史. 東洋書院.

横手市史編纂委員会, 1981, 横手市史<第一章商工業/第一節横手木綿織物業・染色業>. 横手市.